

今上天皇の人生に学びたい。

小生がまだ高校生だった頃、皇太子様だった今上天皇は軽井沢で巡り会われた美智子妃殿下とご結婚された。1959年(昭和34年)のことである。それまでの皇室は多くの場合、皇族、華族からお妃をお迎えし、ご結婚されることが多く、平民のご出身である美智子様とのご結婚には、様々な抵抗があったらしい。この間の秘話に関しては、昭和天皇の侍従長を務めた入江相政の著作『入江相政日記』に語られており、「香淳皇后が秩父宮妃勢津子、高松宮妃喜久子の両親王妃とともに**反対のご意見を、昭和天皇に訴えた**」という内容の記述がある。常磐会(学習院女子部の同窓会)の会長、松平信子ら旧華族の女性たちの反発も強く、松平信子に対しては昭和天皇自ら了承を求めて、ようやく決着したとも言われている。しかし一方では平民から妃を求める姿勢には賛成も多く、特に近親結婚になることを憂えた当時の入江侍従長らの計らいもあって最終的に1958年(昭和33年)11月27日、ご結婚が皇室会議において満場一致で可決された。

★ ★ ★ ★ ★

1959年(昭和34年)1月14日に納采の儀が、同年4月10日に結婚の儀が執り行われた。明治以降では初の民間出身の皇太子妃であり、またご結婚に至る過程が報道されたこともあって、市民からは熱烈に歓迎され、お二人の馬車による参列を一目見ようと、この頃はまだ高価だったテレビが一挙に普及していった。世はまさに『ミッチーブーム』、皇室の一挙手一投足がテレビでオンエアされ、1959年には『皇室アルバム』なる番組も登場したほどだった。そしてお世継ぎもお生まれになり、ご安泰かと思われた最中、折からの学園紛争に見舞われ、昭和天皇は『浩宮の代で最後になるのか』と思われたこともあったらしい。

★ ★ ★ ★ ★

昭和天皇は第二次世界大戦の敗戦後、1946年(昭和21年)1月1日の年頭詔書(いわゆる人間宣言)により、天皇の神格性などを否定し、新日本建設への希望を述べられた。2月19日、戦災地復興視察のため横浜へ行幸、以降1949年(昭和29年)まで全国各地を巡幸された。その一方で1947年(昭和22年)5月3日、日本国憲法が施行され、天皇は「日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」(第1条)と位置づけられた。6月23日、第1回国会(特別会)の開会式に出席し、勅語で初めて「わたくし」を使った。1950年(昭和25年)7月13日、第8回国会(臨時会)の開会式に出御し、従来の「勅語」から「お言葉」に改められた。昭和天皇の戦後は、我々が想像する以上に困難と苦悩の連続であったことは想像に難くない。ともあれ陛下はこの困難な時代を何とか乗り切られ、日本の歴史以来始めて『人間天皇』として、世界各地をご訪問されて、国民統合の象徴としての道を模索され、日本の国家主権回復を確かなものにされたのである。

★ ★ ★ ★ ★

昭和天皇が崩御されると、今上天皇は昭和天皇の築かれた基本を更にしっかりしたものとし、人間天皇として、更には平和を愛する国家国民統合の象徴として歩まれた。しかしこれより先の皇太子時代、1975年(昭和50年)の沖縄国際海洋博覧会に際しては、いくつかの事件もあった。同年7月17日、美智子妃を伴い『ひめゆりの塔』に献花のため訪れたところ、その場に潜んでいた過激派2人(沖縄解放同盟準備会メンバーの知念功と共産主義者同盟のメンバー)から、火炎瓶1本を投げつけられる事件(ひめゆりの塔事件)が起こった。これに際して同日夜、皇太子殿下はこの犯人らを攻めることはなく、「沖縄戦における県民の傷跡を深く省み、平和への願いを未来へつなぐ」と県民の心情を思う異例の談話を発表している。ここにおいても今上天皇の現在のご心境の一部を垣間見ることが出来る。

1989年にご即位されると、「国民と共に日本国憲法を守り、国運の一層の進展と世界平和、人類の福祉の増進を切に希望して止みません」とのおことばを發した。そして即位以来、日本国憲法の精神を守りつつ、天皇としての真のあり方について常に模索しておられる。さらにはイラクに派遣された自衛隊を皇后とともに接見した。PKOで派遣された自衛隊員、災害救助にあたった自衛隊員に対する接見はすでに行なわれていたが、これは異例のことであり、戦後、昭和の頃には考えられなかったと言われている。神戸の大震災や、東日本の被災地をこまめにご公務の傍らご訪問されて、人々の心の安らぎを祈られるとともに励まされた。両陛下に手を取られて、被災者の皆様もどれだけ勇気付けられたことであろうか。

★ ★ ★ ★ ★

1987年、昭和天皇時代、在位中の天皇としては史上初めて沖縄をご訪問する予定だったが、陛下は病に倒れたため、その名代として皇太子殿下は沖縄を訪れ、10月24日、南部戦跡の平和祈念堂で「先の大戦で戦場となった沖縄が、島々の姿をも変える甚大な被害を被り、一般住民を含むあまたの尊い犠牲者を出したことに加え、戦後も長らく多大の苦勞を余儀なくされてきたことを思う時、深い悲しみと痛みを覚えます」との天皇のお言葉を代読された。昭和天皇の悲願であった沖縄行幸の代行を果たされたのである。この折には予定になかった『ひめゆり学徒隊の慰霊碑』(ひめゆりの塔)にも行幸し、このことは2007年(平成19年)になってワイドショーで紹介された。そして2003年(平成15年)までに、47都道府県のすべてを巡幸されている。

★ ★ ★ ★ ★

2005年(平成17年)6月28日に今上天皇は、サイパン島訪問に際して、当初の訪問予定に含まれていなかった韓国・朝鮮人慰霊碑(追悼平和塔)に皇后をお連れになって立ち寄られた。これは天皇の意向だったとされており、陛下の真に人の命の大切さを思うお気持ちが現れている。2007年(平成19年)の佐賀県行幸の際、到着した

天皇を出迎えた市民の一部が自然発生的に『君が代』を歌い始めた際には、その場に足を止め、皇后を促して歌が終わるまでその場に留まり、歌が終わると手を振ってこれに応えられた。このご訪問に際しては、提灯行列も出るなどの歓迎も受けられたが、ここには戦後何十年にも及ぶ平和へのご祈願と、国民と『歩』を一つにされて来られた陛下のご努力が、成就された瞬間だったと、ご推察申し上げる次第である。

★ ★ ★ ★ ★

今上天皇のお心の中では、父昭和天皇が中道に崩壊された後を引き継がれて、戦後の人々の様々な心のわだかまりを、長い時間と直接行幸されることによって、ほぐされることを、自らの任務と心に定められていらしたように思う。陛下が特に心を痛めておられるのは、沖縄の6月23日、広島の日6月6日、長崎の日8月9日、そしてかの玉音放送の日8月15日である。安倍政権が沖縄に対して極めて無慈悲であるのに対して、陛下は自らの危険をも省みず、何度『ひめゆりの塔』に花束を捧げられて、哀悼の意を表されたことであろうか。安倍政権の戦後70年談話に対しても、美智子妃殿下は記者団に対してあえて、A級戦犯に対してのお言葉を述べられた。安部晋三の祖父岸信介の沖縄を見捨てた姿勢が蘇っておられたのかもしれない。平和憲法をとにかく無視しがちな安倍政権に対して、両陛下は心から憂えているように拝察される。こうした両陛下のお志が、先の大戦の激戦地すべてをご訪問され、花束を手向けられたように思えてならない。そして人間天皇が今後、何をなすべきか、人間として、天皇として、どう生きてゆくべきかの姿を、自らの行動をもって世界に宣言されているようにお見受けする。この陛下の人間としての生き方は、今後も次世代へと引き継がれ、21世紀以降、日本の天皇としての生き方の規範とされることであろう。

★ ★ ★ ★ ★

戦後の戦地だけではない。国民統合の象徴として、激甚災害があったエリアには必ず慰問に訪れ、被災者の手を取って、その痛みつけられた心を慰められ、心を強くして生きてゆくことを示されている。両陛下とも既に80歳を過ぎており、ご公務だけでもお忙しい。これに加えて、あちこちの被災地へ向かわれることは、体力的に見ても並大抵のことではないだろう。そこには自らのご健康よりも、国民一人ひとりの力になりたいというご意志がありありと見えてくる。我々日本人は先の大戦においては世界の人々に多大な迷惑をかけ、多くの人を命を空しくした。しかし今上天皇を国民の象徴としてお迎えすることにより、世界の人々に日本国民は平和を愛してやまない国民であることを印象付けられた。戦後70年、慰安婦問題を初めとして悲しい禍根は終わることを知らない。しかも現政府は戦後日本が抱えた課題を軽んじる傾向がある。しかし両陛下はこうした問題に真正面から取り組んでおられ、天皇として何が出来るかを常にお考えになっているご様子である。我々はこうした両陛下のお志に少しでも報いることを念頭において、日本人としての生きる道を求めてゆかなければならないのだろう。